

*

この著書は、笠原のじさの語ったむかしを、全くそのまま、活字にしたものであることは、一見して私にはわかり得た。厚い本を手にとり、バラバラとめくってみると、いずこのページからも、じさの声が、耳にとどく。そして、じさの持つむかしの深さに感嘆する。編者の熱い思いがじさのむかしをていねいに再生

させたに違いなく、じさを知る私には懐しくうれしい。

越後の雪の夜にひそやかに語られたむかしが、わが息子の中に伝えられたろうか。そして私の語ったむかしが。息子は、この春、関西の学府に飛び立ち、二度目のたよりに「時に、つらいが 快い」とあった。

(かっこう文庫主宰・駒沢女子短大)

『フェミニズム論争』 江原由美子 編 (勁草書房)

『わかりたいあなたのための フェミニズム・入門』 (別冊宝島 85)

『アグネス論争を読む』 アグネス論争を楽しむ会 編 (JICC出版局)

『男がさばくアグネス論争』 小浜逸郎 著 (大和書房)

『男も女もへ半分こ』イズム 男も女も育児時間を! 連絡会編 (学陽書房)

『子育て みんなすきなようにやればいい』 山田真 著（太郎次郎社）

『男の家庭科先生』 福田三津夫・緑 著（冬樹社）

宮坂 寿子

かつて、と言ってもそう昔ではない学部生時代に、「フェミニスト」とは、レディーファーストを重んじる優しい男性のことと教わったことを今でも思い出すが、この私の経験からしても、「フェミニスト」という言葉ほどその使われ方が急速に変化した語も少ないのではないだろうか。今日の分脈で「フェミニスト」もしくは「フェミニズム」という言葉が市民権を得たのは、ここ四、五年のことのようだ。ただ、この言葉がマスコミでもはやされているほどには、その内実の理解は進んでいるわけではないし、またこの頃のマスコミの商業主義的風潮のもとで、「なんか特別の女性たちのもの」という反発すら、男性のみならず女性たちの間に生まれてきていることも否めない。

このような状況のなかで、「フェミニズム」を知る

ための手引きとして、江原由美子（編）『フェミニズム論争——七〇年代から九〇年代へ』が出版された。一九七〇年代のウーマンリブ運動を端緒としたこの二十年間、私たち女性が何を論じ、そして何を論じ残してきたのかを概観することを目的とした書である。江原氏によれば、「フェミニズム論」とは、「現代社会における性差別、性による不平等の認識」をもつ言説であるという。逆に言えば、女性を研究対象としていても、その論が「性差別の認識」をもたなければ、フェミニズム論とは言えない。

ここでしっかり受け止めたことは、この書の産みの根拠となった江原氏の問題意識、すなわち、「日本のフェミニズム論は、いまだ自己の歴史を持つに至っていない」が、それは諸説の評価や解釈が「まだ決し

て十分ではない」からだという問題提起である。「論じ残すことや偏った評価がフェミニズム論を損うのではない。それらを恐れて評価や解釈をしないですますことが、フェミニズムの論の全体性の確立を妨げるのだ。」

まず第一章「フェミニズムの70年代と80年代」では、江原氏が「ある時代においてもっとも影響力がある発言や主張をした論客の移り変わり」（氏はそれを〈主体の交替〉と呼ぶ）に着目して、時期区分を行い、各時期の論点、および各時期間の関係性を個別に論じている。そしてその整理に基づき指摘された論じ残された問題が、90年代への展望を拓くために、第二章「家父長制をめぐる」以下、「〈近代家族幻想〉からの解放をめざして」「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか」「フェミニズムと科学技術」「クリステヴァ理論の可能性」という構成で展開されている。

本書が、硬派でとっつきにくいと感じられる方に

は、『わかりたいあなたのための フェミニズム・入門』（別冊宝島八五）が手頃かもしれない。決して軟派ではないが、読み物風仕立てで、わかりやすく、おもしろい文章で書かれている。しかも単に手頃というだけではなく、『フェミニズム論争』では扱われていない、明治時代以後の日本のフェミニズムの歴史や世界各国の動向まで、盛り沢山の情報を提供してくれる。

ところで、『フェミニズム・入門』の一執筆者である金井淑子氏によれば、80年代には、ラディカル・フェミニズム対エコロジカル・フェミニズムの論争、「女性の労働市場からの総撤退」をめぐる論争、「アグネスの子連れ出勤」をめぐる論争という、三つの特筆すべき論争があったという。この中で、最も広い裾野をもち身近に感じられたのが「子連れ出勤論争」であった（「アグネス論争」はきわめて多様な内容を含むものであったが、上野千鶴子氏の朝日新聞紙上への投稿により子連れ出勤論争へと「意図的」にすりかえられた）。

この論争の直接の資料は、アグネス論争を楽しむ会（編）『アグネス論争を読む』に収められている。また「アグネス論争」の全体の構図に関しては、小浜逸郎『男がさばくアグネス論争』に詳細な解説が施されている。

ここで問題のネックとなったのが、やはり「母性」観の差異であった。この論争に限らず、女性について論じる場合、「母性」というものをどう捉えるかということは絶対避けて通れない踏み絵である。日本の土壌としての母性主義ということではしばしばフェミニズムから攻撃を受ける「母性」であるが、平塚らいてう以後の日本のフェミニズム論は、基本的に、この「母性」概念を対立軸に展開されてきたのであり、現在もその構造は不変である。

この論争は確かに「古くからある家庭重視論を、母親役割に限定して、しかも働кинаから子育てする立場において展開する形を提起し、分岐点の位置を大幅に働く側に移した」（江原）という新局面を拓いたが、

皮肉にも、「母親役割に限定」されたということ自体が、人々の「母性」への関心の高まりの反映に他ならないということを証明している。実際、論争への参入者の一般化とともに「母性」強調派が優勢に転じたのは、予想される結果であったといえども、フェミニズムの前に立ちはだかる厚い壁をみせつけられることとなった。

いずれにせよ、この論争は、様々な母性観、職業観、現実の選択肢等の有無を反映して、「80年代における女性たちの葛藤をあますところなく呈示」（江原）したのであり、最近のフェミニスト及びその周辺の関心事を、しかも本音で知るための格好の素材を提供してくれたのである。

またこの論争時においては、男性の発言の少なさもしばしばやり玉に挙げられたりしたが、その後、現在までの特徴として、子育てをめぐる男性側からの声の増加を挙げることができようか。

「男も女も育児時間をー連絡会」（編）『男も女も

〈半分こ〉イズム』第一部「職場ゲリラたちからの報告書」では、会社や同僚の圧力にも屈せず仕事の仕方を変え、子育てにもかかわろうとする五人の男性の奮闘ぶりが紹介されている。また、福田三津夫・緑『男の家庭科先生——福田さん家の日常生活術』は、日本でも数少ない男性の家庭科専任教師が、「男性も家事の分担を」と呼びかけるに至った自らの変化を綴る体験談である。『子育て みんなすきなようにやればいい』の著者山田真も医師の傍ら、子どもが通う共同保育所の保父をも経験した特異な経歴を持ち、診療所での親子とのかかわりの中から「男ももっと子育てを」を語る。

これらの本の出版が即、現実の男性の変化を示すものでないことは言うまでもないが、フェミニズムが提起し続けてきた、性別役割分業の流動化という課題を、一部の男性といえども、自らの体験にひきつけて呼びかける人々の登場は、時代の流れを感じさせるものである。

「日常的現実の中の些細な『そぐわなさ』や『居心地の悪さ』の感覚……その奇妙なズレの感覚が、わたし一人ではなく、かなり多くの女たちに意識的、無意識的に共有されていると気づいたときに、わたしのフェミニズムが始まる。」——これは、アグネスの子連れ出勤論争でも注目された「有名人フェミニスト」(江原)の一人とされる落合恵美子氏の言葉である。このような素朴な「ズレの感覚」は、特別視された一部の女性だけでなく、女性、男性を問わず人間なら誰しも日常生活の中で感じるのではないだろうか。

私は、「フェミニズム」が揶揄や嘲笑の対象としてではなく、人間一人一人がよりよく生きるための問題提起として、より多くの人々に共有されることを願っている。性別役割分業の見直しは、何も子育てに限った問題ではなく、既に迎えつつある高齢化社会においても不可避の視点になるに違いない。

(お茶の水女子大学大学院)